

金光教の声

(平成21年10月～12月放送分)

No.389

【おへつ】

『L I F E』第10回／別れ	3	破かれた離婚届	35
『L I F E』第11回／介護	8	離島の声を受け止めて	39
『L I F E』第12回／古い	13	人を助ける保険屋さん	43
『L I F E』第13回／終焉（しゅうえん）	17	受け継がれていくもの	47
三線（さんしん）の音を島風にのせて	23	答えはいつも心にある	51
立教150年記念特別番組 神様のお喜び	27	何でもご相談ください	55
不思議な通知	31		

金光教放送センター

《登場人物》

ユキ（主婦）

昭夫（ユキの息子・小学生）

昭夫 お母ちゃん、犬買うてよー。

ユキ あかん。

昭夫 何でやのー。友達のところ、みんな犬飼うてるよー。

ユキ みんな？

昭夫 そうや。

ユキ 先生が言うてはったわ。みんなというのは

2、3人やて。第一、マンションの人なん

か犬は飼えへんはずや。

昭夫 そうかて、栄ちゃんとも、春香の家も飼うてるよ。

ユキ そんならそこへ行つて見せてもろたらよろし。

昭夫 お母ちゃんのいけず！

昭夫 お母ちゃん、犬。

ユキ 昨日あかんで言うたでしょ。犬はおもちゃとは違うの。命があるの。簡単に買うのはええけど、その後の世話が大変なんよ。

昭夫 ぼくがちゃんと世話をするし。

ユキ へえー、信じられんねえ。勉強ちゃんとす

る言うて、宿題忘れるような昭夫がねえ。

昭夫 一緒に見に行こうよ。

昭夫 約束する。散歩かて、餌やるのかて、全部

ユキ 一人で行ったらええやないの。

ぼくがする。お母ちゃんは買うてくれるだ

昭夫 一緒に行きたいんや。

けでええんや。

ユキ まあー、昭夫がうちと一緒にきたがるな

ユキ (気のない返事) へえー。

んて珍しいねー。絶対に買わへんからね。

昭夫 今日、学校の帰りな、春香の家に行つて見

せてもろたんや。メツチャ可愛かったで、

昭夫 見るだけでええねん。

スリッパぐらいの大きさやの。

(子犬の鳴き声)

ユキ (同) へえー。

ユキ 金色のゴールデンレトリバーの子犬と目

昭夫 なあ。

が合うた、なんてつぶらな、訴えかけるよ

ユキ 何よ。

うな可愛い瞳。私は、その瞳に負けたのだ。

昭夫 駅のそばにペットショップが出来たん知っ

てる？

昭夫 やった。やったー。

ユキ 知ってるよ、それがどないしたん？

ユキ 約束やで。犬の世話は絶対に昭夫がやるん

よ。

昭夫

うん！ 名前、何て付けようかなあ…。フラットってどう？

ユキ

しかしながら、当然のことを忘れていた。フラットはどんどん大きくなる。1年もたつと23キロにもなり、とてもやんちゃだ。

(子犬の鳴き声)

昭夫

フラット、お手や、お手。よし、賢いなあ。

昭夫

昭夫、散歩はまだやる？
ぼく、まだ宿題が残ってるねん。

ユキ

約束やろ。こんな狭い家の中ではフラットかて可哀想やないの。外で運動させんと。

ユキ

昭夫。お手もええけど、ちゃんとしつけをしなさいね。家でトイレをする時には、おむつのシートを敷いて、ちゃんとそこでするようにとか。今日の散歩は？

昭夫

(仕方なく) はーい。

ユキ

(フラットが) 家に来て3年目。昭夫は習い事やの勉強やの言うて、最近ではほとんど私が犬の散歩に行っている。まあ、私のダ

昭夫

はーい。行つてきまーす。

イエットにええかと思うて行く。しかし、

ものすごい力で引つ張る。私はへトへトになる。

ユキ

そんなある時、私は道の段差にけつまずいて転び、手元のリードが外れた。フラットは駆け出した。そして、猛スピードで走って来た車にひかれて死んでしまったのだ。

昭夫

お母ちゃんごめんな、ぼくが散歩の約束すっぱかしたから…。

ユキ

(涙声) うちが悪いんや。昭夫ごめんな。

昭夫

お母ちゃん、ぼくかてもものすごく悲しいけど、お母ちゃん毎日毎日フラットの写真見て、泣くの止めてや。ご飯もろくに食べてへん

やないの。

ユキ

うちは、犬との別れがこんなにつらいものやとは、思ってもいなかった…。フラットがここに来た時なあ、スリッパをくわえて離さへんし、家中追い掛け回したなあ…。

昭夫

うん。

ユキ

うちが風邪で寝込んだ時、フラットがそばに来て心配そうな顔して、うちの顔をなめてくれた…。

昭夫

お母ちゃん、元気出してえな。フラットかてその方が喜ぶと思うよ。

ユキ

今、初めて気い付いたんや。平凡やと思ってた毎日、ほんまは大切な大切な一日やつたんやなあ。フラットに教えられたわ。

(食器を洗う水道の音)

昭夫 お母ちゃん！ お母ちゃんテレビ。

ユキ 何やの。

昭夫 捨て犬を譲ってくれるて、テレビでやってるで。

ユキ (気の無い返事) へえー、もう生き物はこりごりや。それに、フラットが死んでまだ半年しかたつてへんやないの。

昭夫 あ、お母ちゃん見て見て、フラットにそっくりや。あー消えてしもた。会いたいなあ…。

ユキ (同) ふーん。

昭夫 ぼく、見に行きたいなあ。お母ちゃん、行

こうな、なあ。

ユキ (同) ええー…、そやけど行くだけやからね

ー。

(ワンワン！ 子犬の鳴き声)

ユキ おー、よしよし、よしよし。昭夫、名前、フラットにしようか。

金光教放送センター

富子 隣町に住む夫の母親から電話がかかってき

た。義母は一人住まいだ。

正雄 オレ、ちよつと心配やから見てくるわ。も

しかして、認知症：ちやうやろか。

《登場人物》

富子 ここで一緒に住んだらどうやの？ 説得し

富子

てよ。

たつ（富子の義母）

正雄 そうやなあ。今まで一人の方が気楽でええ

正雄（富子の夫）

言うてたけどなあ…。もう80近いんやか

ら。そやけど、お前ええのんか？

（電話の鳴る音）

富子 良いも悪いも仕方ないのだ。義母との同居

正雄 え？ 何やて？ …鍵？ 無くしたんか。

…それに…、財布も無いで…？泥棒が入っ

た…!？ ほんまか？

たつ 富子さーん。お腹が空いたんやけど、お昼

まだやろか。

富子

今、支度してますから、ちよつと待っててくださいいね。

富子

ほな、私もお手伝いします。けど、大方取れてますわな。終りにしましょ。お母さん、折り紙お上手でしたわねえ。買うてきましてんや。教えてくださいな。

富子

ほんまはとつくに食事は終わっている…。

たつ

まあ、綺麗な色やこと。

義母の頭は、あっちの世界に行ったり、こつちに逆戻りしたりしている。

富子

お義母さん、どの色が好きですか？

たつ

ピンク色ですな。…あのなあ。

富子

お義母さん、何してはるんですか？

富子

はい。

たつ

このごろ私の頭があっちへ行ったりこつち

富子

義母は、座布団の中から綿を引っ張り出して千切っている。

富子

そうですよ。

たつ

畑に草がようけ生えて、草取りしてますの

たつ

ほな忘れんように、この折り紙に名前書いときまひよ。

や。

富子 あんた、起きて起きて！ お義母さん 居

はらへんの。

正雄 (眠たげに) トイレとちやうか…。

富子 家中調べたんよ。どこにも居はらへん。

正雄

家中、鍵を付けんとかあんなあ。

は川沿いの道を、泥だらけの足でふらふら歩いていた。

(犬の遠吠え、深夜の雰囲気)

富子

それでも義母はなぜか家を抜け出す。私は

富子 (息ハアハア) お義母さーん！ お義母さー

ん！ どこ行かはったんやろ…。もしかし

て…。

する義母をなだめても言うことを聞かない時は、私も一緒に夜の町を歩いた。

正雄 そうや、前に住んでた家や。

富子

お義母さん今日はどこへ行かはるんです

富子 元住んでいた家にも義母は見当たらず、結

か？

局、お巡りさんに見つけてもらった。義母

たつ

ちよっと、そこまで。あんた付いて来んで

もええのに。

あ。

富子 もうへトへトや、何とかしてよ。

(車の急ブレーキ)

正雄 オレかて仕事があるんや。

(富子、自転車の急ブレーキをかけるも車と接触)

富子 だから、もうちよつと早く帰るとか。

正雄 忙しいんや。

正雄 足のねんざだけで済んで良かった。ほんまに済まんかったな、お前一人に無理させて。

富子 夫は明らかにこの現状を避けている。自分の母親が壊れていくのを見ているのがつらいのだ。

オレ、2、3日会社休むから、ゆっくり寝てたらええわ。

(自転車のベルなど、街の雰囲気)

たつ お母さんはどこかへ行かはったんですか？

正雄 お母さんて…？

たつ ここのところ、姿が見えんのやけど。

富子 自転車で買い物に行くだけでもしんどいな

正雄 お袋のお母さんなんて、とつくに死んでる

やないか。何を言うてんねん。

たつ お母さん。お母さん。

たつ あんたこそ、何を言うてるんですか。うちに優しゅうにしてくれはる、お母さんですな。

富子 はいはい。今日はお天気やから、お散歩に行きましょね。帰りにお義母さんの好きなお菓子を買いに行きましょ。

富子 どないしたん？

たつ へえ。

たつ お母さん！ この人の作ったご飯はまずいんです。

富子 それからひと月後、義母は肺炎であっけなくこの世を去ってしまった。私は義母の折

正雄 えっ!? おれの作った…?

紙で鶴を折り、写真の前に供えようと思い、

たつ おいしいご飯、早よ作ってくださいなあ。

義母の好きなピンク色を抜き出すと、義母

富子 私は義母が急にいとおしくなってきた。本

の震えた字が目にとまった。

当の母親になったつもりで、お世話をしよ

たつ 富子さん。おおきに。

う。大変やけど、大変と思わん程度に頑張

ろう。

金光放送センター

《登場人物》

つね (77歳)

山口 (77歳)

(病院の雰囲気。カーテンをそっと開けるつね)

つね 山口さん。具合どう？

山口 あんた…、どなた？

つね 嫌あねえ、顔見て分かんないの。

山口 えー…？

つね 小学校と中学が一緒だった、米原つね。

山口 えっ!? 近所に住んどったつねちゃんか？

へえー、あんたがあなのつねちゃん…。

つね 昨日、喜寿のクラス会だったのよ。皆に会

いたいなあと思って、出て来たら、あなた

のこと聞いてびっくりして、取りあえずお

見舞いに来たの。で、どうしたのよ？

山口 腹を切った。

つね そう、大変だったのね。

山口 何でわしだけこんな目に遭わんならんのか

と思うたら情けないわ。皆ピンピンしとん

のに。

つね あら、違うわ。クラス会でも、腰が痛いとか

かひざが痛いとか、血圧が高いとか、そん

な話ばっかり。

山口
へえー。

つね
ねえ、昔、母に聞いた話なんだけど「さいかけ」って知ってる？

山口
「さいかけ」…、それ何や。

つね
お百姓さんの言葉なんだって。毎日畑に行
って耕していたら、くわの切れ味が鈍る。

鈍った時に農機具屋さんに持って行って、

くわの先に鋼を足して焼き直してもらう

の、そしたらくわが前より一層切れ味が良
くなるんだそうよ。

山口
わしとどう関係があるんや？

つね
だから、あなたは今まで一生懸命働いてき
た。ここらで「さいかけ」をして、また元

気に新しく出発ってこと。だからゆっくり

治そうね。

山口
(涙声)…おおきに。そんなこと言うてくれ
たのはつねちゃんだけや。ところで、つね
ちゃんはどないしてるんや。

私…？ 結婚してからずーつと横浜。

そら知ってる。

でね、10年ほど前に夫が死んだの。

そうか…。

つね
しばらく一人暮らししてたの。そうしたら、
東京に居る息子が一緒に住もうって言う
の。

山口
結構やないかい。

つね
うん…、はじめは良かったのよ。孫の面倒

とか、家事とか手伝ってたから。だけど孫も大きくなっちゃったし、家のことも年だからって、手伝わせてもらえないの。

山口 結構なご身分やないか。

つね 結構なものですか。人の役に立つから生きがいがあるんで、何もしないでボーツとしてるのってたまないわ。最近、時々思うの。

山口 何を？

つね 何もすることがない私なんか、生きてる意味が無い。そのうちに家族の迷惑になったらどうしよう。その前に死んでしまいたい、って。

山口 つねちゃん。

つね 何よ、改まつて。

山口 さっき、わしのこと励ましてくれたのに、あんたの話聞いてたら、えらい矛盾してるやないかい。

つね そう？

山口 病人の前で、元気な人が「死にたい」やなんて、ど厚かましい話や。

つね ごめん。

山口 そんなら、外へ出て行って、人の役に立つたらええんや。年取っても人の役には立てるんやで。

つね 外って…？

山口 うちの嫁はんなんか、ほとんど家になんかおらへんで。まあ、わしのがうっとう

しいのかもしれないけど。

つね あ、ひがんでる。

山口 近くの老人ホームに行つて、お話ボランテ

ィア言うのをやってる。

つね へえー。年寄りが年寄りの話し相手？

山口 そや、そんでな「同じ話を何回も聞かされ

る」て、家に帰つて愚痴るんや。「ほんな

ら辞めたらええやないか」て言うても行く

んや。こないだなんか「おじいさんにプロ

ポーズされた」なんて、まんざらでもない

顔で言うねん。アホらして聞いてられへん。

どっちがボランティアされてるのか分から

へんなど、わしはいつも言うてる。

つね へえー。

山口 同じ生きてるんやったら、嘆いて暮らすよ

り、楽しいに暮らしてる方がええと思うけ

どなあ。

つね ありがとう。

山口 ちよつとは参考になったか？

つね うん。で、あなたは何をしてるの？

山口 わしか？ わしは狭い庭やけど畑にして、

野菜を育ててる。楽しいで。そうや、この

あいだな、畑の草取りしたら、四つ葉の

クローバー見つけた。で、その時、つねち

やんのこと思い出したんや。

つね え？ ああ、小学校の帰り道、あなたが探

してくれた。あれ、どこに行つたかなあ…。

山口 そんなもんとつくに無くなつてるやろ。十

年一昔で言うけど…。

つね 私たち、五十年一昔ね、あつという間。

(笑う、山口とつね)

『LIFE』第13回／終焉(しゅうえん)

金光教放送センター

《登場人物》

妻 (73歳)

夫 (78歳)

医師 (男性)

(病院の中)

医師 奥さん。

妻 あ、先生。いつもお世話に…。

医師 ちょっとこちらの部屋へ。

妻 はい。

妻

病院の裏庭に出て泣いた。そんなことって、

医師 このレントゲン写真を見てください。

後2カ月の命だなんて……。しばらくしてハ

妻 …。

ッと気付く、早く病室に戻らないと夫が不

医師 今日の検査結果です。がんが肺に転移して

審に思う。急いで洗面所に行った、真っ赤

います。

な目が写る、大急ぎで化粧を直し、売店に

妻 …は、はい。

行く。

医師 申し上げにくいのですが、ご主人は、後2

夫

どこに行ってるのかと思った。

カ月ほど。

夫

売店がとても混んだの、アイスクリーム

妻 えっ!? だって先生、この前は余命半年から

妻

買ってきたけど、一緒に食べましょうね。

1年って…。

ああ、おいしそうだ。

医師 残念です、進行が思っていたよりも早く。

夫

でも、このことはご主人にはおっしゃらな

い方が良いと思います。

夫

(馱の雑踏)

妻

こんなに元気そうな人たちがいっぱい歩いているのに、なぜ、よりによって夫が…。

夫

おいおい妬（や）いてるのか。

妻

そうよ。

また、涙があふれてくる。でも…私はこれ

夫

おれたちが仲人した、会社の田口君の奥さ

からの一日一日を大切にしよう。そして明

ん。忘れたのか？

るく振る舞おう。

(病院の中)

妻

私は先生に言われてから、夫の命の引き算

妻

今日はどう？

ばかりしている。けれど、命は数えるものではなくて、与えられたものだ。今与えられている命をどう生きるか、最高のものにしてあげたい。

夫

まあまあだ。

妻

今、入り口ですれ違った中年の奇麗な女の人、見たような気がするんだけど。

妻

何かしたいこととか、食べたい物ってある？

夫

お見舞いに来てくれた。

妻

どういう知り合い？

夫

決まってるだろ、良くなって、家に帰って、

夫婦で温泉旅行なんかしたいなあ。

夫 ねえ。

妻 じゃあ、早く良くなるように頑張りましょ

妻 何？

うね。

夫 家に帰りたい。

妻 数日後、洗濯物を持って廊下を歩いている

夫 一日だけでいいんだ。

と、また先日の田口さんの奥さんに会った。

妻 先生に聞いてみるわ。

軽く頭を下げて部屋に帰る。

医師 そうですねえ。…では…、1泊だけ。何か

妻 さっき田口さんに廊下で会ったわ。また、

あつたら直ぐに戻つて来てください。

来てくださったのね。

夫 ああ、ちよつと頼みごとをしてたんだ。

(鳥の鳴き声)

妻 私に頼めばいいのに、水くさいなあ。

夫 怒ってるのか？

夫 久し振りだなあ。やっぱり家が一番いい。庭

妻 そりやそうよ。

のもみじが奇麗な色だ。

妻 そうね、今年は特に鮮やかな赤。

妻 夫は、とても懐かしく、いとしいものでも見るように、ゆつくりと家の中を眺め、庭を見回す。

妻 ねえ、何かおいしい物作るわ。何がいいかしら？

夫 君のお得意のスープ、後は何でもいいよ。ちよつと書齋に行ってくる。

妻 夫は大好きだったスープをほんの少し飲み、おかゆを少し食べただけで、ベッドに横になってしまった。

夫 久し振りに外に出て疲れたよ。

妻 あらー、じゃあ温泉なんて行けないでしょ。たくさん食べて元気にならなきゃ。

妻 私は夫のベッドの脇に座り、昔の楽しかった話ばかりを一人で話し続けた。気が付いた時、ベッドにもたれて眠っていた。私の背中には毛布が……。体力のない夫が無理をして掛けてくれたのだ。

妻 数日後、夫は旅立ってしまった。私は夫の書齋に久し振りに入る。机の上に、リボンをかけた箱とカードが……。「え、これ何？」

夫の声

お誕生日おめでとう。ぼくはそのころまで、生きていられないかもしれない。今までのいろいろとありがとう、ぼくは幸せだったよ。田口さんに頼んで、君へのプレゼントを買って来てもらった。気に入ってくれるとうれしいが。もう一度ありがとう。

妻

(M・涙声) 夫の字は乱れていた。箱の中には、きらきら光るペンダントが入っていた。忘れていた。今日が私の誕生日だったのだ。

三線（さんしん）の音を島風にのせて

金光教放送センター

沖繩三味線・三線を奏で、名司会で盛り上げる、人を楽しくさせる名人。金光教那覇教会で信心を進める比嘉康之さんは、名護市でファミリーレストランを営む56歳。教会にはいつも奥さんと一緒に参拝しています。

比嘉さんが金光教と出会ったのは、レストランのアルバイトをしながら、大学受験を目指して予備校に通っていた時のことでした。

ある時、バイト先の店長さんと金光教の先生に会う機会がありました。それは那覇教会長の林雅信先

生でした。比嘉さんは、どういう宗教か分からぬまに、その後、那覇教会にも連れて行ってもらいました。

店長さんは、すべてに厳しい人で、比嘉さんはミスをするとよく怒鳴られました。そんな店長さんが教会の先生の前では、まるで人が変わったように穏やかな顔で、仕事のことをあれこれとお話します。

金光教の教会では、人の願いを先生が聞いて神様に取次ぎ、神様の願いを人に伝える「お取次」という営みが、お结界という場でなされています。店長さんはそのお取次を受けつつ、仕事に取り組んでおられたのでした。

ふだん、従業員には見せない経営にかかわる葛藤

(かつとう)も、先生には包み隠さずに聞いてもらっていたのでしよう。一日の出来事にお礼を申し上げ、仕事の立ち行きを願っている。話の内容は分からなかったけれども、その後ろ姿から、比嘉さんは何かしら尊いものを感じ取ったのです。そして金光教の教会に不思議さと興味を覚えました。「店とは打って変わった穏やかな顔で、店長は先生に何を聞いてもらい、何を教えてもらっているのだろうか」。

比嘉さんは、それから通学前に教会に立ち寄ってみるようになりました。といっても、願い事があるとか、悩みを抱えているというわけではありません。相談するのでもなく、祈るのでもなく、毎朝8時頃から9時頃までジッと座っている比嘉さんに、林先生は、来る日も来る日もお話をしました。教えは、

最初は難しく感じ、何を聞いたか覚えていないのですが、そうした日々が、大切な力として、比嘉さんの中に蓄えられていたことは、後になって分かってきます。

比嘉さんは、店長さんに人間的な魅力を感じていました。教えをしたり、信心を強要したりせず、その姿から何か他の人と違うものを感じたのです。比嘉さん自身は、「何となく、教会に行ってみた」と言いますが、実は、店長さんの生き方の元にある金光教の信心を知りたいという「求める気持ち」があったからこそ、参拝が続いたのでしよう。

次第に、比嘉さんに、店長のような調理師になりたい、という気持ちがあわき起こってきました。そして、受験勉強に見切りをつけ、店長さんが経営する

グループのお店で修行することになったのです。林先生も賛成してくれました。

しかし、修業先は寒さが厳しい長野県でした。沖繩に生まれ育った比嘉さんにとっては初めての経験でした。林先生は、「3年間は辛抱せよ」と常に励まし続けました。知る人のない沖繩の地に教会を開いた林先生の計り知れない辛抱の経験は、そのまま比嘉さんの辛抱を支える力となりました。

林先生の祈りを受けて、結局4年7カ月も修行を続けることができました。そして、昭和57年に名護市に念願のファミリーレストランを開店出来たのです。地元の人に落ち着いてくつろいでもらえるように、そして、家族やグループでそれぞれが好きなものを選ぶようにと、和食も中華も、改めて修行し

ました。ここにも、人を楽しくさせる比嘉さんの姿勢が感じられます。

さて、そんな比嘉さんが今取り組んでいるのは、お父さんの介護です。2年前、ふるさとの離島でお父さんが脳梗塞（のうこうそく）で倒れました。幸いにも発見が早く、障害は残りませんでした。高齢による認知症はありますが、ヘリコプターで本島の病院に運ばれたので、仕事をしながら介護が出来ます。仕事との両立は大変ですが、夫婦で役割分担を決めて、介護にあたっています。

介護は、盛り立てるように演出するのがコツだと比嘉さんは思っています。お父さんを呼ぶにも役者のように呼びかけると、お父さんも楽しく応答してくれる。まるで、掛け合い漫才のようです。人を楽

しませて、自分も楽しくなれるという比嘉さんの姿勢は一貫しています。その姿勢のおかげで普通は大変な介護もうまくいっています。子どもたちも、おじいちゃんを大切にしてくれるので、教会の参拝にも差し支えがありません。

ある時、お世話になっている介護施設の施設長さんが、比嘉さん夫婦に尋ねました。「介護をしていると、家族間のトラブルが起こるものだが、あなたたちにはそれが無い。何かが違う。何が違うのか?」と。知らず知らずのうちに、金光教の生き方が身に付いていたから、家庭に不和がないのだと認めてもらったのです。本当に教会のおかげだと改めて思いました。振り返れば、初めて教会に参拝するきっかけになった店長さんの姿に、何か尊さを感じたのと

同じように、施設長さんも、比嘉さんに、何かが違うと感じてくれたのです。

生き方の中にじみ出る尊いもの。これは、信心のおかげでしょう。神様の願い、先生の祈り、み教えによって、知らないうちに、信心による生き方が身に付いてくる。教会はそんな不思議な力があるところなのです。

「金光教の信心をしてよかった」と比嘉さんは言います。そして、この信心をもっと多くの人に知ってもらいたい。教会に参拝してほしい、ということが、比嘉さんの今日の願いなのです。

顔につながる。笑顔って伝染するんです。そんな笑顔の瞬間にたくさん出会えました。

桂 かい枝

おはようございます。落語家の桂かい枝です。

私の実家は金光教の教会で、子どもころから困ったことがあると、自然に神様をお願いしていました。

私は、落語の魅力を世界の人にも知ってもらいたいと、これまで世界12カ国を回り、外国の人たちに英語で落語を聞いてもらっています。

学校のテストの前にお参り。買って欲しいものがあつたらお参り。好きな女の子に告白する前にお参り。まさに、困った時の神頼みです。神様にお参りをすると、何となく気分が楽になって、難しい顔が少し笑顔になります。

外国の公演では、公演前は、「日本のコメディアー？ 一体何をするねん？」てな感じで、遠くから不安そうに、不思議な顔で見ていた人たちが、終演後はみんなすごい笑顔になって、僕に近づいて来てくれるんです。握手とサイン攻め。笑顔ってほんまに人と人をつなげるんですね。お客さんの笑顔が僕の笑

「今日もこうして高座に上がれます。ありがとうございます。今日もどうぞお客様に笑顔で喜んで頂

けますように」

ところが、今の時代、笑顔でいることが大変です。笑顔でいられれば気持ちは幸せなはずなのに、どうしてなのか、人間って悩みが絶えない、迷うことも多い。つい、うつむいて、なかなか笑顔になれない人が多いです。

今から150年前の江戸時代の末ごろも、今と同じように、いや、今以上に大変な時代でした。世の中は「幕府を倒せ！」とか、「開国しろ！」という声が上がって、時代が大きくうねろうとしていました。考えたらものすごい不安ですわねえ。

そんな時代に、備中、今で言う、岡山県に一人のお百姓さんがいてはりました、赤沢文治という人ですが、この人は神様から、あるお願いをされました。

「世の中には、苦しんでる人がたくさんいる。お前は、仕事を辞めて、どうぞ、その苦しんでいる難儀な人たちを助けてやってくれ！」と神様から頼まれました。

そこで赤沢文治さんは仕事である農業を辞めて、取次（とりつぎ）という神様の御用に専念するようになりました。その赤沢文治さんのことを私たちは金光様と呼びています。

取次って聞きなれない言葉ですよ。字で書きますと、受け取るの「取る」と、「はい、次！」なんという時の「次」、英語で言う、「next」の「次」です。難儀な人の悩みや心の内を聞いて、神様に取次いでくださり、神様の思いや教えを人に伝えて、助かり立ち行く方へ導いてくださる、これが金光教

で言う取次です。

金光様のお取次は、落語の中に出てくるご隠居さん、じんべさんに似てるんですよ。長屋の住人、上方落語で言うと喜六・清八、江戸落語なら熊さん・八つつあんが、思い悩んだり、分からないことが出て来た時、気軽に相談出来る存在、それがご隠居さんです。

お取次って、ご隠居さんに生き方を教えてもらうたりするのと同じです。

(四拍手の音)

「金光様、神様にはどのようにお願いしたらよろしいねん？」

「別に難しいことはないんじや。親にもの言うように朝起きたらお礼言い、よそへ行く時は行って参りますとお届けすればよい」

そうか、神様にお問い合わせするのも親に話すように言えばいいんかあ、と合点がいきますわなあ。ね、なんか世の中のこと教えてくれるご隠居さんみたいに思いません？

こんなふうにして、子どもから大人まで、小さな問題から大きな問題まで、遠くは大阪や九州からも、金光様のお取次のおかげを頂く、つまり、助かって笑顔になる人が増えていきましたん。

私も金光様のお取次でホッと笑顔になれたことがあるんです。言うても150年前の金光様と違います

よ、四代目の金光様。私、高校3年生の時、受ける大学受ける大学みな落ちました。まあ、気持ちええくらい。一生懸命勉強して勉強して、それでも受け

るところ受けるとこ全滅しまして。今は「受験の失敗なんて大したことない」とか言えますけど、当時はものすごい挫折でした。挫折というより、もうこの先、人生どうなるんやろう。すべてあかんのんと違うかと、思い詰めながら行ったのが、金光様のところ。金光様に、自分の思いを全部ぶつけたんです。

長いこと30分はしゃべってたと思います。金光様はじつと聞いてくれてはりました、最後にポツンと…、「列車に乗り遅れたらなあ、次の列車にのりやあええんじや」。優しい岡山弁で言われました。

「乗り遅れたら次の列車？ は？ あっ！ そう

か」。そう思ったらすごく気が楽になりました、次頑張ろうと、前向きに新たな気分で目標に向かうことが出来ました。

金光様のこの一言がなかったら、私受験失敗にくじけてしまうて人生先に進めんかったかもしれせん。「また次の列車に」という、この一言頂いたから、よっしゃ！ 神様をお願いしてまた勉強しよう頑張ることが出来ましてん。ほんまありがたい一言でした。

人は一人ひとり顔も違えば、言葉も違う。しかし、神様にしたたら、一人ひとりが可愛いわが子のようなもんなんやと思います。それは、今もこの先もずっと変わりません。みんながどんな大変なことに会っても、そこから助かり、お互い仲よう、笑顔にな

つていくことが神様が一番お喜びになることではないでしょうか。

またお目にかかりましょう。桂かい枝でした。

不思議な通知

金光教放送センター

一通の通知が久美子さんのもとに届きました。

それは、県庁の職員への採用試験を受けに来るよう
に、という通知でした。久美子さんは、そんな申し
込みはしていません。家族や知り合いに聞いてみ
ても、心当たりのある人はいませんでした。

久美子さんは、昭和16年に神戸で生まれました。
太平洋戦争が始まった年です。お父さんは戦死し、
お母さんは、故郷である現在の山形県天童市に疎開
し、必死に働いて、久美子さんとその妹を育てまし
た。

久美子さんは、高校を卒業する時、銀行に就職が決まったのですが、父親がいないという理由で、突然内定を取り消されました。高校の先生のおついで建築会社の事務の仕事に就いてはどなく、山形県の県庁から職員採用試験の通知が届いたのです。

不思議に思いましたが、とにかく、指定の日時に試験を受けました。その結果、県庁ではなく、県が管理する宿泊施設で働くことになりました。それが、長い長い奮闘の日々の始まりでした。

出来たばかりのその施設。事務職員は久美子さんだけ。帳簿付けを始め、一切の事務をこなさねばなりません。予約を受け付け、調理場と相談して料理の材料を手配し、部屋を回っては備品を確認して補充や整理をします。お客さんからの苦情を聞き、靴

磨きを始め、ありとあらゆる雑用をこなし、夜中になって、ようやく帳簿を付ける時間が取れるのです。土日に休むなど考えられません。

しかし、久美子さんを悩ませたのは、仕事そのものより、人間関係でした。仲居さんをしている女性の同僚は、なぜ久美子さんだけが事務職なのか、とねたみましたし、男性職員からも疎まれました。それが、久美子さんが、金光教の教会に足を運ぶきっかけとなったのでした。

久美子さんのお母さんは、苦しい生活の中で金光教に出合い、毎日教会に参拝していました。久美子さんも参拝を勧められていましたが、それまでは、参拝する気になれなかったのです。教会に参拝した久美子さんは、額に入ったみ教えのようなものに目

を留めました。そこにはこう書いてありました。

「おかげは和賀心であり 今月今日で頼めい」

久美子さんは、これを見て、ハッとしました。「そうか。おかげはわが心から生まれるんだ。自分の心を変え、自分で何か動きを始めていかなければ、問題は解決しないんだ」。よし！何か取り組みを始めようと決心した久美子さんは、金光教の教典に書かれたみ教えを、一日一カ条ずつ、毎日半紙に筆で書き写すことを始めました。

書き写したみ教えは、いつしか久美子さんの心に染み込んでいきました。仕事中に、やり切れない思いになった時、ふとみ教えが浮かんでくるのです。

「人のことを先に願え」「人間を軽く見るな。軽く見たら、おかげはない」。ああ、自分は、自分につらく当たる人のことを、心で責めていたなあ。それでは駄目なんだなあ。相手のことを願わせてもらう。久美子さんはそれから、譲れるところは譲って、相手を立てるよう務めました。また、支配人に談判して、女性の職員が交替で事務の仕事を手伝えるようにしました。これは、結局、在庫管理をみんながしていくことに繋がり、営業成績を大きく伸ばす元にもなったのです。

こうして、仕事の内容は充実していきました。しかし、勤務はあまりに厳し過ぎました。久美子さんは、何度も辞めたいと申し出ました。一度目は、20歳の時、二度目は、22歳の時です。花嫁修業に裁縫

を習いたいからと理由を話すと、支配人は、「うちから習いに行かせるから辞めるな」と引き留めました。三度目は、25歳の時です。結婚した直後で、主

婦としての務めを果たしたいと話しましたが、やはり支配人は許してくれませんでした。それどころか、支配人は、久美子さんを役付きにするよう、県庁に掛け合っていたのです。女性が管理職になることなど思いもよらない時代のこと。また、30（歳）前で役付きというのは前例がありませんでした。しかし、支配人は、辞表を胸に上層部に掛け合い、久美子さんは、主任心得という役職に就きました。続いて、主任、係長に、そして、最後は課長にまで昇進していくのです。

初め、宿泊だけだった業務は、やがて、結婚式や

法事などにも広がりました。引き出物、衣装、送迎など、久美子さんの仕事は、忙しくなるばかりでした。

久美子さんはお客さんにとって、唯一の窓口であり、頼りになる相談相手でした。心を込めて結婚式のお世話をした人から、何十年かたって、「久美子さん。久美子さん。孫が出来たのよ」と赤ちゃんを紹介されたとき、久美子さんは、しみじみと喜びをかみ締めました。

四度目に辞めたいと言ったのは、昭和の終わりごろ。施設の大きな改修があった時です。すっかり長い付き合いとなった支配人は、今度も辞めさせてくれませんでした。

結局、久美子さんが退職したのは、平成8年、58

歳の時でした。それから1年後、40年勤務した施設

は、静かに閉鎖されたのです。

一通の不思議な通知は、思ってもいなかった人生

への扉を開いてくれました。そこで久美子さんは、

つらさや悲しみも味わいながら、しかし起きてくる

ことから決して逃げず、信仰に支えられながら精一

杯の努力をしました。

その結果、多くの人から喜ばれるような働きを現

すことが出来たのです。そして、仕事の厳しさと向

き合う中で、細やかな思いやりや、問題に取り組ん

で解決していく生き方を身につけていったのです。

そんな久美子さんの姿は、今、娘さんや、周りの人

たちの手本となり、大きな励ましとなっています。

破かれた離婚届

金光教放送センター

「今朝、こんなメールを主人からもらったんです。

『いつもありがとう！感謝しています』って。もう

うれしくて、うれしくて！主人からこんなメール

をもらえるなんて……。これも信心しているおかげ、

教会の先生のおかげです」と言われるのは、二人の

大学生を持つ、奈良県にお住まいの46歳になる石田

聡子さんです。

そんな喜びを語ってくれた聡子さんの信心は、祖

母からの信心で、三代目になります。ご主人とは、

教会の先生の勧めもあつて結婚したのですが、はじ

めは余り乗り気ではなかったようです。性格は正反対で、どちらかというタイプではない人だったと言います。それが、聡子さんも20代も半ばにきて「そろそろ結婚かな？」と思っていた時期でもあり、仕事は国家公務員で安定しているし、また教会の先生が勧めてくださる人だから、まあ良いかなと思って結婚したのです。

結婚して2、3年経った頃、やはり懸念していたとおり、性格の違いからか会話が成り立たない二人になっていることに気がついたのです。夫の紀夫さんは、話をするにも理路整然と筋道を立てて話します。ところが聡子さんは、話の始めと終わりが合わないといと紀夫さんからいつも注意されケンカになります。

しかも、紀夫さんが仕事から帰宅するのは夜の11時、12時となり、それからの食事です。聡子さんも仕事をしており、その準備と片づけだけでも大変です。しかも紀夫さんは土曜も日曜も仕事で、夫婦の会話はまったく無くなってしまったのです。二人の子どもの高校受験のことを相談したくても、「子どものことは君に任せた」というだけで話になりません。ただの同居人となっていたのです。このことが聡子さんには大変苦痛でたまりませんでした。

子どもは、上が男の子で下が女の子の年子です。その下の女の子が高校に入学したら離婚すると聡子さんは決意しました。そんな中、聡子さんはたびたび教会に参拝しました。参拝して、教会の先生に話を聞いてもらうのです。夫婦の間柄を。先生は1時

間、2時間。時には3時間、4時間と聡子さんの話をじっと聞いてくださいました。聞いていただくと、心が少し軽くなるのです。それでも主人との間は以前と変わらないまま日々が続きました。

仮面夫婦も限界に達した平成18年。娘さんが高校に進学したある日のことです。帰宅した紀夫さんに突如、離婚届の用紙を渡しました。紀夫さんはビツクリした面持ちで、その用紙を破りました。ところが聡子さんは二枚目の用紙を持っていたのです。紀夫さんは、「もう一度やり直したい」と言いました。聡子さんは「もう無理!」と言い、泣き崩れました。悶々とした日々が一週間ほど続いたある日のこと。教会でお祈りをしていた聡子さんは、自分の心に「人を責めるばかりで、自分はどうかなのか? 主

人も大変な職場で頑張っているではないか?」という思いがわいてきたのです。

それは教会の先生が常々言っていた、「自分が変わらなければ、相手は変わりませんよ」という言葉があつてのことでした。聡子さんの心に変化が生まれたのです。

聡子さんはまず、自分から夫に挨拶をするように努めました。朝の「おはよう」、寝る前の「おやすみ」を明るく言うのです。すると紀夫さんも返事をするようになり、少しずつ会話も生まれました。

心が変わると、神様がお動きくださるんでしょうか。紀夫さんが夕方5時に仕事が終わる地方の役所に出向することになったのです。もちろん休日も休めるようになりました。二人で食事をしたり、映画

を見に行ったりする時間ができるようになります。時間のゆとりが心のゆとりとなって、家族を考える時間が持てるようになり、会話も増えてきました。そして何より、教会に参拝する時間も出来るようになりました。「これはもう、神様が与えてくださった転勤でした」と聡子さんは言います。

この4月、2年ぶりに多忙を究めた、前の官庁に戻ることになりました。聡子さんは52歳になる紀夫さんに言いました。「大変な職場だけど、あと4年だけ我慢してね。下の娘が大学卒業するまでいいから。定年まで頑張らなくていいから。退職後の生活は何とでもなるから。私たちには神様が付いてくださってるもん」。

聡子さんは言います。「このことがあって、人の

苦しみがひとごとでなくなりました。教会の先生が何時間も私の話を聞いてくださったように、私も人の悩みを聞いてあげること努めています。そういう自分がまた嬉しいです。自分の心が変われば相手の心も変わり、それが良い回転となって、次々と良いことが起こってくるんですね。今朝のメールもその一つです」と。

聡子さんの信心に生きる、自信に満ちた目はまばゆいばかりでした。

金光教放送センター

縄に住む両親の元に帰りました。両親と別れた時の寂しさを聞いてもらいたくて、幾度か、「お母さん」と声をかけたものの、一向に構ってもらえませんでした。

空港を飛び発った飛行機は一路、大城ヨシ子さん72歳が待つ沖繩へ。やがて着陸態勢に入ると、眼下にはエメラルドの海にポツンポツンと小島が見えてきました。

子どもの大城さんにとっては、こうした出来事とおして、「心の内は人に明かせないもの」だと子ども心に理解してしまいました。以来、やるせない思いを胸に秘めたまま年を重ねていきました。

会場に到着後、早速大城さんのお話を伺うことにしました。大城さんは9人兄妹の2女として生まれ、4歳の時に家庭の事情で横浜の親せきに預けられました。やがて太平洋戦争が始まり、防空壕（ぼうくうごう）に逃げ込む日々を送ったと言います。

戦後しばらく経って、10歳になった大城さんは沖

でも、あとになって振り返ると、お母さんもまた戦渦にまき込まれ、食糧難の中、多くの子どもを食べさせていくことは大変だったろうなあ、と思うようになりました。その頃のことを思いを寄せながら、「あの時はねえ」と語る大城さんの表情には切なさを感じられました。

やがて大城さんは結婚し、夫婦で懸命に働きま
した。でも生活は厳しいものがあり、話し合いの上、
1歳の娘を連れて夫とは別居することになりました
た。そのような大城さんを心配した周りの人が、親
切心であちらこちらの宗教に誘ってくれました。好
意を受けて、その都度お参りをしたのですが、どこ
を訪ねても心に響くものが無かったそうです。

やがて保健師となった大城さんは、家庭の問題を
抱えたまま仕事に励みました。そのような中にも、
「問題を抱えているからこそ、人の悲しみが分かる
のではないだろうか」と、ふと思ったそうです。

こうした思いを抱いた中で、昭和46年のある日、
金光教の信心をしている職場の方からの誘いを受け
て、初めて出向いたのが金光教那覇教会でした。神

前でお祈りしている先生の姿を目にした瞬間、「あ
あ、ここだ！ 私が来るところはここだったんだ」
と、胸が熱くなつたと言います。大城さんは、今ま
で胸の中にずっと抱え、人に語れなかった思いを、
先生に初めて語りました。その時、何時間もじっと
耳を傾けてくださった先生の温かさが、とてもうれ
しかったと言います。大城さんの心が開かれ、明る
さが増した頃から、夫婦の関係も家庭もだんだんと
整っていきました。

沖縄では、保健師の宿命とも言える医療過疎の離
島勤務が課せられます。主な業務は、島民の巡回診
察の補助や健康指導を始め、大変な仕事量だそうで
す。この荷が重い離島勤務の話が、家庭を持つ大城
さんにも寄せられて来ました。先生に相談すると、

先生はすぐに神様へお祈りをしてくださいました。

お祈りの後、先生は「この地に差し向けられた私の使命は、戦中戦後と大変なご苦勞をかけた沖縄に、真の平和が訪れますようにと祈り続けていくことです。大城さんにもきつと神様の使命があるはずですよ」と、日頃から話をされている意味を込めてのことでしょうか、「人すべてに神の使命あり、島いづくにも神の光あり」と色紙に書いて、大城さんにご手渡していただきました。「そうだ！ 大変な離島勤務だからこそ、神様が私に願いを掛けておられるのだ」と決心して、色紙を胸に抱き、単身、島に赴きました。

ところが赴任してみると、現実の医療事情は想像以上に遅れたものでした。加えて、島民にとって思

い出したくもない沖縄戦の悲しさや、離島対策の遅れに伴う生活の貧しさには厳しいものがあり、中には、「島のつらさがよそ者には分かるものか」と心を閉ざす方もありました。

こうした状況を先生に相談するうちに、今日まで自分の悩みをひたすら受けてくださった先生の姿を思い起こしました。そして大城さんは、足繁く家々を訪ね歩き、小さいことにも真剣に耳を傾けていました。すると、次第に心を開いて、貧しい生活から起きてくる家族の問題を相談しに訪れる方も現れってきました。その都度、行政に掛け合いながら解決していくうち、瞬く間に2年の任期を迎えました。ようやく島の人たちも心を開いてきた頃でもあり、心残りに思われた大城さんは、先生に相談をして任

期を1年延ばして島に留まりました。やがて、その任期を終えた大城さんが島を離れる日、迎えの船を待つ棧橋には「お世話になりました」と別れを惜しむ島民の姿がありました。

現在では保健師を退いて久しくなりますが、「神様の大切なお祭りには、嫁いだ二人の娘に三人の孫も揃って参拝してくれます。賑やかですよ」と、実に幸せおばあちゃんです。でも信心に緩みは見られません。三人の孫たちがこれから先、親にも言えない問題に出合った時には、「さあ、私の出番」と、しっかりと構えておられる大城さんには、信心のたくましさを感じました。

金光教放送センター

保険代理店を経営する大山淳一さん49歳は、「受け取った方の心がほんのり温かくなるように」と、「保険だより」をお客様や地域に配って16年目を迎えます。

「保険業は七夕様と言われるようにお客様とは1年に一度、契約更新する時しか会わない。けど、もつとお客様を身近に感じたい、そして、多くの人に金光教を知ってもらいたい」と言われる大山さんは、まずお客様と親密になるためにと、この「たより」を作りました。

自分がお客様だったら保険の内容をクドクド書いてもあまり読みたくなかったと大山さん。「たより」は金光教の放送や新聞などの内容を元にした「心がほっとするようなコラム」が中心で、創刊号は200部。現在は1000部を超え、近くの方は手渡し、お留守の方には郵便受けに、距離があれば郵送していただきます。

今、このコラムは社員でもある大山さんの奥様、はるみさんが担当しています。例えば、ある号の「たより」には「よい言葉を掛け合おう」というテーマで、あるお母さんの次のような体験談が紹介されています。

「子どもたちが洗濯物をきれいに取り込んで畳んでくれても、素直にお礼を言うことができません。

でも、毎日の食事を『おいしいね』と言ってくれる夫や子どもたちの声を聞くと、何だか心が満たされる思いがします。これからは、日常のあいさつだけでなく、『ありがとう』というお礼の言葉、『素晴らしいね』という褒め言葉、『すみません』というお詫びの言葉など、家族の間でもできる限り声を掛け合っていきたいと思いました」と、心の中が変わっていく過程が書かれています。「保険のことよりも生き方の参考になる方がお客様に喜んでもらえると思ったからです」と大山さん。中には創刊号から綴っているお客様もいて、「いいことが書いてありますね」「そのとおりだね」といろんな声があり、時には人生相談を受けることもあるそうです。

大山さんが金光教を知ったのは、最初に勤務した

スーパーに勤めていたはるみさんと知り合ったことがきっかけでした。やがて大山さんとはるみさんは恋愛結婚しました。

はるみさんは、おばあさんの代から熱心に金光教の信心をしていたので、大山さんは、はるみさんを教会まで送り迎えすることが多くなりました。

はるみさんとの結婚生活の中で、彼女の魅力は金光教の信心に裏打ちされていると感じた大山さんは、最初は教会の前に車を止めてはるみさんを待っていました。教会の奥様から「車に乗って待っているんだったら、教会の中に入って待てばどうですか」と勧められました。教会で先生や奥様と話をする中で、「金光教の考え方は道理にかなっている」と納得。次第に金光教にひかれ、「ここよりも良い

生き方が出来るところがあると思っただらいつでもお参りをやめてもいいですよ」という先生の自信あふれる言葉に衝撃を受け、入信しました。

実は保険の研修を終え代理店を始める時も、ある社長さんから、「うちに来ないか」という話があり、正直、仕事のリスクなどを考え、心がぐらつきましたが、教会の先生から「易きに流れるという気持ちがあるだろう」と言われて腹が決まり、一人で保険代理店を開業し、一層、信心も励むようになりました。

保険の仕事をしているといろいろな現実遭遇します。

こんなこともありました。大山さんのお客様の一人、Aさんは「たより」の読者でした。ある時、

保険料の入金が滞り続けているAさんを訪ねました。

「たより」を通して親しくなっていたこともあり、この時、Aさんは思い切って大山さんに今の苦しい実情を打ち明けました。

当時、貴金属業を営んでいたAさんは、貴金属を購入した借金の返済が厳しく苦しんでいたのです。

大山さんは、これは自分の力だけではとても助けることができないと思い、一緒に教会へ参拝し、先生に現状を話しました。

先生はAさんに、「過去を引きずらず、覚悟を決めて、一から出直さない」と話しました。

Aさんは先生の言葉に心動かされるものがあり、所有していた全ての貴金属を手放して、大山さんの

下で保険会社の社員として一からやり直す決心をしたのです。

親会社での研修を終えたAさんは資格を取って現在、大山さんの保険代理店の社員となり、借金も完済し、家族共々幸せな日々を送っています。

大山さんのモットーは、「お客様の幸せのために保険代理店の役割に奉仕すること」。

本当にこのお客さんのためになる保険をと考え、丁寧にアドバイスします。事故の連絡があると、契約者も相手も「助かりますように」と、神様に祈りながら現場に向かいます。そして、被害者も加害者も立ち行くようにと祈りながら業務を行うのです。そうしていくうちに、お客さんたちとも信頼関係が出来、身の上相談に乗ることも多くなりました。こ

うした体験を重ねていくうちに、ただ保険を売るだけでなく、本当に人が助かるお役に立ちたいと思うようになりました。

「お変わりありませんか」と、今日も笑顔で手渡す「保険だより」は人助けのための大事な架け橋になっています。

金光教放送センター

自分のこれまでの人生を振り返って見た時、あの時あのことがあったから今の私がある。その時には良いことと思えず、大変な思いをしたけれども、そのことがあったからこそというものが、皆様にもおありでしょう。

奈良県にお住まいの布引光枝さんは68歳。光枝さんにとってのそれは、長女恵子ちゃんの病気でした。

恵子ちゃんは、小学3年生の時、遠足の帰り、途中から足を引きずるようにして帰ってきました。そのうちにその足が痛み出しました。そして、お腹に

も痛みが出て、何も食べることが出来ません。痛み
の原因が分からないまま、その日の夜も痛くて痛く
て眠れません。あちこちの病院で見てもらって、や
つと、それが血管性紫斑病による痛みだと分かりま
した。耳慣れない病名で、いまだにその病気のはっ
きりした原因は不明だそうです。それに腎臓の病気
として残っていく可能性があるというのです。

かわいいわが子が思いがけなくそんな病気になっ
て、心配で、可哀想でなりません。何とかしてやり
たい、と思った時、長い間眠っていた光枝さんの信
仰心が呼び覚まされました。昔、親といっしょにお
参りして手を合わせていた金光教の教会のことを思
い出したのです。

光枝さんのご両親は、とても熱心に信心されてい

ました。光枝さんも幼いころから両親に連れられて教会によくお参りしていましたが、結婚して親元を離れてからは足が遠のいていました。お父さんは病気がちでしたが、何かあるたびに、教会に参り、神様にすがり、助けられていたことを思い出しました。

光枝さんは、近くにある金光教の教会を探そうとしました。すると、郵便配達をしているご主人が、「おれ、見たことあるぞ。八つ波（やつなみ）のマークやろ、それ、確かに見たことある」というのです。二人で教会を探し回りました。

ありました。金光教のご紋がある建物が見つかったのです。金光教菖蒲池教会でした。すでに夜11時にも回っていましたが、門をたたき、「娘が痛がります。助けて下さい」と先生に訴えました。先生は娘

の病気にうろたえる光枝さんの不安を受け止め、「しっかりと心を神様に向け、一つひとつの事柄の上におかげを頂いていきましょう」と言われ、共に祈ってくれました。2、3日、痛がつて眠ることが出来ずにいた恵子ちゃんでしたが、その晩は不思議にぐっすり眠りました。

そんな我が子を見つめながら、光枝さんの不安は和らいでいくのでした。教会の先生を通して今は亡き父の祈りを感じることが出来たのです。

翌朝、何としても治して頂こうと強い気持ちを持って、恵子ちゃんを連れて病院へ行きました。「即入院です。半年ぐらい入院することになりますよ」とお医者さんから言われました。治療はベッドの上での絶対安静が第一で、塩分を控えた食事療法など

も行います。

幼い娘を一人病院に残して、光枝さんは「後にも先にも、この時くらい一生懸命になれたことはない」と、今、その時のことを思い返します。入院した次の日から、歩いて40分ほどかかる教会の朝6時のお祈りに参拝して職場へと向かいます。

仕事を終えると病院へ行き、娘の顔を見て、病院のすぐ近くにある教会にも参拝します。実はこの教会は恵子ちゃんを病院へ連れて行く時、偶然にも車の窓から金光教のご紋が目に入り、「あつ、ここにも金光教の教会がある」と、とても心強く感じたもので、引き寄せられるようにしてお参りしたのでした。

家に帰ると、改めて菖蒲池教会に参り、先生に娘

のその日の様子を報告して、回復を祈ります。そうして家に帰ると、夜の9時から10時近くにもなりませんが、それから一生懸命に千羽鶴を折ります。翌朝、折れた分を教会でお祈りしてもらってから、病院へ持って行き、娘の枕元につるしてある千羽鶴に足していきます。

この時の光枝さんは、自分に出来る限りのことをしようと願いをかけましたが、ただ教会に参拝して祈ることしか思い浮かびませんでした。仕事との両立は並大抵のことではありませんでしたが、家族の協力を得て、一日、また一日とお参りを重ねるうちに神様が待っていて下さるような喜びを覚えてくるようになりました。

繰り返し繰り返し同じことを続けて45日。恵子ち

やんもどんなにか早く家族の元に帰りたいかったこと
でしょう。ベッドの上での安静を辛抱強く守って、
お医者さんから「半年の入院」と言われていたのが、
思いのほか、早く退院することが出来、たくさんの
お世話になる中で恵子ちゃんのその病気は完治した
のです。

恵子ちゃんの病気は、光枝さんの両親によってま
かれた信心の種を芽生えさせてくれ、信心を支えと
した生き方へと導いてくれました。その後、ご主人
の喘息やご自身の腰の手術など、さまざまな困難に
出合った時にも、神様に心を向けて乗り越えること
が出来ました。

「神様にしっかりと抱かれ、神様が敷いてくれた
線路の上を安心して歩かせてもらっている。そんな

思いがするのですよ」と、光枝さんは話してくれま
した。

そして今、その信心の種は恵子さんにもまかれ、
育ち始めています。

若林正信

したと言つては、その場をごまかしていました。
学校の成績が下がり始め、家庭では学校でのスト
レスのためか、言葉も行いも乱暴になる直人君に、
杉山さんは厳しく接しました。

杉山さんは37歳。事務機器の製造会社に勤めてい
ます。家族は奥さんと息子の直人君です。

息子の直人君は中学2年生。寡黙でおとなしい少
年です。その直人君が、実は中学1年生のころから、
クラスでいじめにあっていました。「暗い性格だ」

と決めつけられて何度もからかわれ、無視されたり、
トイレに閉じ込められたりしました。教科書が無く
なり、体操服が引き裂かれてゴミ箱の中に捨てられ
ていたこともありました。その度に直人君は、クラ
スメイトの仕返しが怖くて、教科書も体操服も無く

「大切な教科書や体操服を無くしたと言つて、勉
強をサボろうとする直人の態度が許せない。おとな
しかった直人が最近おかしいと、お母さんはおどお
どしているが、お父さんは、絶対に許さないからな」
と、叱られ続ける毎日でした。

直人君は、親にも担任の先生にも、本当のことが
話せず、気持ちや生活態度がさらに荒れていきまし
た。家にも学校にも自分の居場所がないと思うよう
になった直人君は、朝、起きることが出来なくなり、
中学2年生になって間もなく、学校に行かなくなり

ました。理由も十分に聞かず、無理やり学校へ行かせようとする杉山さんと直人君の関係は、ますます険悪なものとなり、直人君は自分の部屋に引きこもり、外に出ようとしなくなりました。

杉山さん一家は、誰もがうらやむほど、仲の良い家族でした。それなのに今、家族の心はバラバラです。直人君が何を考えているのか分からず、奥さんは疲れきっています。

「何が間違っているのか？ どうすればもう一度、幸せを感じることが出来るのか？」と杉山さんは、毎日考えていました。そのような中で、杉山さんは、幼いころから両親に連れられて参拝していた金光教の教会に行き、思い切って教会の先生に相談してみようと思いました。

休みの日、杉山さんは教会に参拝しました。

「先生、ご無沙汰しています。良い話なら喜んで報告するのですが、恥ずかしい話なので、ご相談するのを迷っていました」。教会の先生は、「勇気を出して話しに来てくれたのですね。恥ずかしがることはないのですよ。良い時も、つらい時も、両方あつての人生なのです」と言ってくれました。

杉山さんは、今まで誰にも相談出来なかつたつらい心の内を語りました。すると先生は、「例えば、お腹がいっぱいの際は、どんなにぜいたくな料理を出されても、食いたいとは思わない。そして、お腹いっぱいに食えることが続いたら、おいしいと感激する気持ちが分からなくなってしまうでしょうね。ところが、お腹が空いてどうしようもないと、ご飯

に漬物だけでも、おいしくて、ごちそうに思える時がありますよね。あなたの心も同じです。良い時ばかりでは、駄目なのです。何が幸せなのか、分からなくなってしまう。人はね、苦勞をして、つらい思いをするから、人の心の痛みが分かり、人を愛すること、幸せを感じて心が満たされることの本当の意味が理解出来るようになるのですよ」。

杉山さんは、先生が優しく背中を押してくださいされているように感じながら、息子の直人君のことを話しました。そして、質問したのです。

「先生、私たち家族は、つらい思いばかりしているのに、なぜ、傷つけあうことしか出来ないのでしょうか」。先生は、優しく答えてくださいました。

「それはね、つらい思いを人のせいにして、そこ

から逃げようとするからですよ。杉山さんの家族は、互いに自分の思いを押しつけ、相手の思いを無視してきたのではないですか。答えはいつもあなたの心にあります。一番大切なことは、相手の心を、よく見てあげること。信じてあげること。信じている思いを伝えることです」。

杉山さんは、「ハッと」しました。この時の先生の言葉は、神様の言葉のようでした。

杉山さんが、以前より厳しく家族に接するのには、理由がありました。

杉山さんの勤める会社は、数年前から経営不振に陥り、会社の立て直しの方法として、社員が次々にリストラされました。人事課長であった杉山さんは、その度に「仕方のないことだ」と自分に言い聞かせ

てきました。それでも、リストラされた社員とその家族のことを考えれば、自分の家族は幸せな暮らしが出来ていると後ろめたく思え、自分の家族に厳しくなつてゆきました。だから、息子が学校をサボり、親に甘えているのだと思ひ込むと、腹が立つて仕方がなかつたのです。

「息子の直人が、いじめにあっているのではない。それで不登校になり、つらい思いをしているのではないかと、うすうす感じていました。それなのに、私は妻の言葉にも耳を貸しませんでした。もっと、息子を信じてやればよかつた。話を聞いてやればよかつた。申し訳ありません」。

杉山さんは、自分のおろかさに気付き、涙が止まりませんでした。

早速、杉山さんは家に帰り、直人君の部屋の前で、何度も、何度も謝つたそうです。

しばらくすると、直人君はドアを開けてくれました。そして、その日から、親子の話し合いが始まりましたが、話し合いというより、直人君が杉山さんに一方的に気持ちをぶつけます。

あまりの激しさに、奥さんが見ている、何時、ケンカになるかと思う時もありました。

それから、2カ月ほど経つたところです。

「お父さんは、黙って聞いてくれる。気持ちが楽になる。自分の気持ち、何とかしなければと思う」とつぶやくように、直人君が奥さんに話しました。

奥さんも、伝え聞いた杉山さんも、うれしくて胸が熱くなりました。

直人君の登校出来る日が、そう遠くないことを信じて、幸せの意味をかみしめる杉山さんでした。

何でもご相談ください

西村憲正

「私が今、元気に仕事が出来るのは、妻と共に金光教の教会に参拝し、神様に祈り、共に支え合うことが出来たからです」と、今年65歳になる麻川博良さんは目を輝かせて語ってくださいました。

麻川さんは、学校を卒業して金属加工会社に入社以来、早朝から深夜まで研究を続け、金属の特殊な微細加工技術を開発し、会社の発展に大いに貢献してきました。麻川さんの長年の研究が公に認められ、創業者の社長が叙勲を受ける栄誉も頂きました。わが国の経済成長と共に歩んできた会社も著しく業績

を伸ばしました。

やがて父親のように慕っていた創業者が亡くなり、新しい社長が就任したところに、麻川さんは意を決して長年働いてきた会社を退職しました。かねてから心に温めていた自分の会社をおこすためでした。彼が56歳の時でした。

麻川さんと三人の社員だけという小さな会社ですが、退職金を全てつぎ込み、さらに県から特別融資を受けて設立することが出来ました。麻川さんが長年培ってきた技術の蓄積を中心に、世界中の微細加工部品のデータをインターネットに載せて販売するという、当時としては画期的な営業方法でした。

ところが会社設立後の4年間、全力を尽くしたインターネット販売ですが、売り上げが伸びないので

す。今でこそネット販売はあらゆる分野で急激に増加していますが、当時はインターネット取引が始まったばかりで利用者もまだ少なく、麻川さんの意気込みとは裏腹に、ほとんど収益につながりませんでした。

いよいよ資金も底をつき、社員の給料も出せないような状態にまで陥りました。銀行からの借り入れは思うに任せず、知人に事情を話し、つなぎの資金を借りて、やっと社員の給与を払うことが出来ましたが、収益がなければ長続きはしません。遂に二人の社員が会社を去り、社長の麻川さんと一番若い社員の二人だけになりました。

困り果てた麻川さんは、奥さんと共に私の奉仕する金光教の教会へ初めて参拝してきました。麻川さ

んは、どのようにこの問題に取り組みばよいのか、会社の状況と辛い胸の内を私に語りました。

私は祈りながら話しました。「あなたは今、仕事が行き詰まってしまったと嘆いておられますが、この世界には行き詰まりはありませんよ。神様の大きな恵みと導きの中に生かされている私たちです。世界は限りなく開かれています。お仕事も研究も、多くの人々やお金や資材など、多くのもののお世話になって、させて頂いているのではないですか。今はさぞかし苦しいでしょうが、ここまで取り組むことが出来たことにお礼を申し、ここから一日一日をしのがせて頂けるように、神様に一心にお願いしましょう」と、私は話しました。

その後、麻川さんは、私がお話したように、お

世話になって今あるということを大切に、朝目覚めると、神様に今日のいのちを頂いたことをお礼申し、仕事が上手くいくように祈りました。また、亡くなった先代社長の遺影にも手を合わせて祈りました。そして、不足の心を出さずに、仕事のなか喜びを探していきました。売り上げや給与の支払いについても、麻川さんは奥さんといっしょに教会で神様にお願いしました。奥さんは「必ず神様が道をつけてくださるから大丈夫よ」と夫を励ました。

このような取り組みがしばらく続いたある日の夜のことです。麻川さんが車を運転し、高速道路を100キロ近いスピードで飛ばしていた時、一瞬、睡魔が襲いました。ハッと気がついた時は中央分離帯に激突寸前で、とつさにハンドルを切りました。ふわー

つと宙に浮いたような感じがして車が元に戻りました。「ああ、神様に助けて頂いた!」と、麻川さんは強く感じました。百分の一秒程も、気付くのが遅れていたらと思うと、しばらく胸の動悸が治まりませんでした。麻川さんは心の底から、神様にお礼申し上げました。そしてこの経験を通して、神様の存在と自分が導かれているということを実感したのでした。

この日を境に、麻川さんの仕事ぶりが変わってきました。助けられた自分のいのちを、仕事をとおして少しでもお役に立たせてくださいという願いが、おのずと生まれてきたのです。インターネット販売で尋ねてこられた顧客に対して、自分に出来ることは「何でもご相談ください」と、仕事の大小にかか

わらず親切に対応しました。

そういう麻川さんの仕事ぶりに応えるかのよう
に、次々と引き合いが増えてきました。そして麻川
さんが心血を注いで開発した微細加工技術に関する
取引も徐々に出来ていきました。最近では、東京の
大手メーカーとの間で新技術の共同開発をする話が
進展し、契約にこぎ着けることが出来ました。やが
て会社の負債も順調に返すことが出来るようになり
ました。麻川さんが奥さんと共に金光教の信心を求
め、そこから神様が喜んでくださる仕事になるよう
な生き方に変えることによつて生み出された、会社
経営の充実発展でした。

金光教の教祖金光大神は、「商売するといふから
神は見ている。商売させて頂くといふ心になれば、

神はつきまといつてさせてやる」と、仕事に向かう心のあり方を教えています。

麻川さんは、今日は京都へ、明日は東京へと、毎日席が温まる暇がないほどの忙しい日々を、「何でもご相談ください。お役に立たせてください」と、生き生きと仕事に取り組んでいます。

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp